

日独文化交流を支えた人々

Förderer des japanisch-deutschen Kulturaustausches (1)

第1回 旧制松江高等学校教官 フリッツ・カルシュ博士

Lektor an der Matsue Kotogakko Dr. phil. Fritz Karsch (1893-1971)

東京医科歯科大学教授 工学博士 若松秀俊

Dr. Eng. Hidetoshi Wakamatsu, Prof. der Tokyo Medical and Dental University

本誌本年5月号「表紙」の主人公で戦前、旧制松江高等学校(現島根大学)のドイツ語の講師として、14年間にわたり教壇に立ち、生徒に大きな影響を与えたドイツ人哲学者、フリッツ・カルシュ博士が亡くなって30年になる。いまや、ほとんど忘れられている彼は、認識の発展過程を考究する人智学を提唱したシュタイナーを日本に紹介した人物でもある。21世紀を迎えて、日本を第二の故郷として愛した同氏を顕彰することは日本だけではなく、日独関係や日本の哲学史研究の上からも大きな意味がある。彼は明治26年、ドイツ東部のプラゼビッツで父ヘルマン、母ルイーゼの間に生まれ、昭和46年にカッセルで没した。大正15年にプラーグ氏の後任として松江高校に赴任、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、また外交官として終戦まで働いた。松江を選んだのはラフカディオ・ハーンの影響による。彼の薫陶を受けた生徒の中には、政界では衆議院議員で、自治相を務めた赤澤正道(昭和2年卒業の4期文乙)、元島根県知事伊達慎一郎(5期文乙)、元衆議院議員の榎橋勇(6期文乙)、衆議院議員、國務大臣十回、衆議院議長を歴任した福永健司(7期文甲)、元衆議院議員の高田富之(9期文乙)、衆議院議員で自民党総務会長、行政管理・防衛庁長官、運輸大臣を歴任した細田吉蔵(9期文甲)や元衆議院議員・労働大臣の山手満男(11期文乙)がいる。外交官としては元イラン・インド・中華民国・ブラジル大使歴任の宇山厚(9期理甲)、海外移住事業団理事、ウルクアイ大使歴任の大城斉敏(10期文甲)がいる。

法曹界では、大阪弁護士会会長、日弁連会長を務めた和島岩吉(5期文乙)、元広島高裁長官の松本冬樹(8期理甲)と同じく元広島高裁長官矢崎憲正(10期文乙)、元福岡高裁長官、国土館大学長を務めた綿引紳郎(15期文乙)が挙げられる。

学術界では「長崎の鐘」で有名な元長崎医科大放射線医学教授の永井隆(5期理乙)、元島根大教授・元琉球大教授の酒井勝郎(5期理乙)、元滋賀大文学教授で雑俎史研究家の宮田正信(9期文乙)、元北海道大印度哲学教授、僧侶で鈴木大拙の後継者の古田紹欽(10期文乙)、元大阪大教授微生物病研究所長で紫綬褒章を受章したウィルス分離研究の奥野良臣(14期理乙)、芸術界・出版界では元カルフォルニア州立フロントン大教授、また舞踏家でドイツ留学後欧米の舞台で活躍(元当協会会員)した邦正美(8期文甲)、岸田国土の劇作同人、大映グランプリ羅生門のプロデューサー・放送作家を務めた異能の士である辻久一(9期文乙)、「暮らしの手帖」社設立、編集長を務めた花森安治(10期文甲)など枚挙に暇がない。

彼は明治44年、ドレスデンにおける国際博覧会で「日本」と出会い、日本に強い興味を抱いた。第一次大戦に志願兵として従軍した後、マールブルク大学でハルトマン門下として哲学を学び、大正12年に哲学博士の学位を



1930年ころの
カルシュ博士



左よりエツメラ夫人、長女メヒテルト、次女フリーデルン、カルシュ博士
(1938年頃)

取得、人智学の研究組織に加わった。大正15年10月に、あこがれの日本に来た彼は松江市奥谷町の官舎に住んだ。そして昭和14年3月にシュヴァルベ氏と交代するまで教壇に立ち、この地で妻、エツメラとの間に、長女、メヒテルト(昭和3年生)、次女、フリーデルン(昭和12年生)に恵まれた。彼は絵が趣味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。彼の描いた宍道湖、嫁が島、袖師が浦、大山、山陰の農村のバステル風景画が現在も二人の娘の手許に保存されている。

また、当時の松江の貴重な写真を数多く残している。彼は生徒にヨーロッパの文化を伝えながら、同時に自らの精神生活を磨き上げた。当時の日本を深く愛し、日本人々を慈しみ、自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えた彼の著述には『カントとハルトマンの比較論述』(日独文化協会、昭和3年)があり、その他ドイツに関する著述(同協会、昭和9年)がある。同僚の高橋敬視教授によるハルトマンの著者の翻訳は彼の紹介と協力によるものであった。昭和12年復活祭の期間に英語講師のウッドマン氏の住む隣家が火の不始末から火災に遭遇したが、近所の助力により鎮火した。そのときの印象がますます日本を好きにした。

同博士に関しては、門下の酒井勝郎氏が『田舎の大学』(私家版、昭和45年)で記述し、同窓会誌「翠松」や旧制松江高校史の「嵩のふもとに」で彼の人物を当時の生徒が語っている。

松江高校を離任した彼はドイツ大使オット氏の仲介で